

## 一・喫茶去

師問二新到：「上座！會到此間否？」云：「不會到。」師云：「喫茶去！」又問那一人：「會到此間否？」云：「會到。」師云：「喫茶去！」院主問：「和尚，不會到，教伊喫茶去即且置；會到，爲什麼教伊喫茶去？」師云：「院主！」院主應諾。師云：「喫茶去！」（『趙州錄』卷下）

師、二の新到しんとうに問う、ちやう上座よ、會て此間ここに到るや？<sup>②</sup>云く、「會て到らず。」

師云く、「喫茶去！」<sup>③</sup>又た那かの一人に問う、「會て此間に到るや？」<sup>④</sup>云く、「會て到る。」師云く、「喫茶去！」院主いんじゆ問う、「和尚よ、會て到らざるは、伊かれを教

喫茶去せしむるは即ち且しばらく置く。會て到るは、爲什麼なにゆゑにか伊を教て喫茶去せ

しむ？」師云く、「院主よ！」院主應諾す。師云く、「喫茶去！」。

①「新到」は行脚して趙州じやうしゆうかん觀音禪院くわんおんぜんいんに来たばかりの僧をいう。趙州は今の河北省石家荘市の趙県。

②「上座」は僧に対する敬称。

③「會てくや（否）？」は過去の経験を問う疑問文。「此間」は近い場所を指す近称の口語代名詞。「之間」は場所を表わす口語成分。

④「喫茶去！」は「茶を飲みに行け！」という命令文。「去」は動詞について動作の方向（こちらから向こうへ）を示す補語。その場合、動作は目的を表わす（くしに行く）。唐代禪院では、相見しやうけんは法堂ほつどうでおこなわれ、お茶は茶堂さどう（茶寮）という飲茶の設備のある建物へ行つて呑む習慣であつた。竈（かまど）に大きな釜を据えて水を沸騰させ、沸かしたお湯に餅茶（団茶）という茶葉を蒸して撞き固めた保存用のものを刀で粗く削つてその粉末を湯に注ぎ入れ、細かい茶葉が沈んだあとのおわづみを柄杓で茶碗にすくつて飲んでいた（陸羽『茶経』）。喫茶の風俗は唐代に広まったが、まづ禪院で坐禅のとき眠気を醒ます薬用として習慣化された（封演『封氏聞見記』卷六「飲茶」）。したがつて「喫茶去！」とは「茶堂へ行つて茶を飲んで目を醒ましてこい！」という叱責である。

⑤「那」は遠称の口語指示代名詞（古代漢語の「彼此」の「彼」に相当し、中古漢語の近称「這」と対す）。「那一人」はそのひとり。もうひとりの行脚僧を指す。この僧は觀音禪院に以前来たことがあつたが、機縁きげんかなわず去つて、またここへ来た。

⑥「院主」は禪院にあつて経営の任に当たる役職。来院者の接待をも掌管した（『禪苑清規』卷三「監院」）。

⑦院主は趙州和尚（觀音禪院の長老、すなわち住持）が初めて訪問した行脚僧にはお茶の接待をする習慣であつたからよいとして、なぜ再来の行脚僧にも同じ指示を与えたのか、意図を測りかねた。「爲什麼」は理由を問う口語疑問詞（古代漢語の「爲何（何爲）」）。

【日訳】師（趙州從諗和尚、七七八〜八九七）は到着したばかりの二人の行脚僧に訊ねた、「そなたは以前ここへきたことがあるか？」僧、「いいえ、ございません。」師、「茶を飲んでこい！」またもう一人の僧に訊ねた、「ここに来たことがあるか？」僧、「はい、来たことがございます。」師、「茶を飲んでこい！」院主が師に問うた、「和尚、来たことがない者にお茶を飲みに行かせるのはともかく、来たことがある者に、どうしてお茶を飲みに行かせるのですか？」師はいきなり呼んだ、「院主よ！」院主ははいと応じた。師、「茶を飲んでこい！」

趙州和尚は院主の問いに答えず、いきなり院主を呼んだ。名前（あるいは役職名）を呼ぶのは、唐代の禪宗でその人に佛性を覚醒させる手段であった。中唐時代に始まる馬祖道一（七〇九〜七八八）の新興禪宗は「即心是佛」（わが心こそが佛である）、「作用即性」（人の感覚・言語・応対の作用にこそ佛性は發揮される）という、従来の佛教学を超えた佛性論を持つて出発した。趙州和尚が「院主！」と呼んだのは、呼ばれて思慮をはたらかせる暇なく「はい」と応ずるのが佛性のはたらきだ、それはなんびとに備わっていること示唆するもので、院主はそのことに気づくべきであった。しかるに院主は呼ばれてただ返事をしたにすぎなかった。そこで趙州和尚は「そなたも茶を飲んで目を醒ましてこい！」と叱責したのである。新到の行脚僧の初到再来を問わず、趙州和尚がいづれをも叱責したのは、行脚を戒める意図であった。禅僧の行脚とは、僧籍を置く寺院（官によって定められている）を離れ、師友を訪ねて悟りの激発の契機を求める行為である。出家して僧となった者はまづ佛教学を修めて専門を持ち、律師あるいは法師（経師、論師）となる。佛教学の教えによれば、出家者は戒律に遵い、教理を学び、定められた階梯を履んで修行に励み、輪廻転生を繰り返し善行を積んで、その果てに佛陀と同じ境位に到ると定められていた。これは印度人が生み出した佛教学理であるが、このような迂遠な思想は現実的な中国人には耐えられなかった。馬祖は『礼記』に書かれた孔子の言葉「道は人に遠からず」（真理は人と離れてあるのではない）という中国思想にもとづいて、「佛は人に遠からず」、「平常心是れ道なり」（佛性はいまこのわが平常心にある）と考えるに至った。これが唐代の新興宗教禪宗の立場であった。行脚僧は従来の佛教学によって今生では悟れないと見極め、これを捨てて、禅宗の指導者を求めて行脚に出る。各地の禅匠はこういう行脚僧を迎えて対話をする。これがいわゆる「禅問答」であり、禅宗は対話の宗教であった。対話を通じて質問僧は人生の劇的な転換を体験し、生きかたが変わる。これが「開悟」である。行脚僧の定型的な質問は「如何なるか是れ佛法の大意？」（佛教の核心はなにか？）、「如何なるか是れ祖師西来意？」（達磨は何故に印度から来たのか？禅とは何か？）であった。しかし唐代の優れた禅匠たちは、「教えることは何もない」として行脚僧を追い返した（徳山「宣鑑」の棒、臨濟「義玄」の喝）。なぜなら、佛性は人人具有なのであり、人に訊いて得られるものではないからである。聖なる価値を外に求めるのではなく（無事）、みづからにおいて究め（己事究明）、「默契するのみ」（黄檗希運）である。こういう唐代禅思想の背景から考えれば、趙州和尚が二人の行脚僧に「喫茶去！」と言ったのは、外に求めまわる行脚を終息せよという示唆であり、そのことに気づかなかつた院主に対して名を呼び、同じく「喫茶去！」と叱責したのは、禅のいかなるものであるかに気づかせるためであった。

## 二、無位の真人

上堂云：「赤肉團上有一無位真人，常從汝等諸人面門出入。未證據者看看！」時有僧出問：「如何是無位真人？」師下禪牀把住云：「道！道！」僧擬議，師拓開云：「無位真人是什麼乾屎橛！」便歸方丈。（『臨濟錄』上堂）

上堂<sup>9</sup>して云く、「赤肉團上<sup>10</sup>に一無位の真人<sup>11</sup>有りて常に汝等諸人の面門より出入す<sup>12</sup>。未だ証拠せざる者は看よ看よ<sup>13</sup>！」時に僧有りて出て問う、「如

<sup>9</sup>「上堂」は長老が法堂に上つて修行者を前に説法し、ついで問答応酬する行事。百丈懷海の「禅門規式」に「其の闔院の大衆は朝參暮聚す。長老、上堂陸座すれば、主事・徒衆、鷹立して側聆し、賓主問酬して宗要を撃揚するは、法に依つて住することを示すなり」（『景德伝灯録』卷六 百丈章附録）。朝參の上堂は粥罷（朝食後）に行われた。この上堂は臨濟院における一回の朝參の記録であろう（臨濟院は趙州真定県の趙州城外東南にあつた。今の河北省石家莊市）。

<sup>10</sup>「赤肉團」は身体をいう。「肉團」は肉のかたまり、生身のからだ。ゆえに「肉団身」ともいう。また「赤肉」ははだかの身。つまりみな肉体のことである。「上」は場所を表わす（このところ）。『祖堂集』卷一九、『宗鏡録』卷九八、『景德伝灯録』卷二八などの早い時期の資料では同じく身体をいう「五蘊身田内」と書かれているが、南宋版『景德伝灯録』卷一一臨濟章では「肉団心上」つまり心臓に改められ、密教的な具象化がなされている。

<sup>11</sup>「真人」は道家で用いられた道の体得者（『莊子』大宗師篇）で、魏晋南北朝時代の漢訳仏典では阿羅漢（修行の最高位に到達した人）の訳語としてもちいられた。しかしここでは「無位」という修飾語を冠して、地位・位階の価値枠に収まらないものを形象化している。しかもそれが生身の人間と一体であること、古い『祖堂集』等が「五蘊身田内に無位の真人有りて堂堂と顕露れ、毫髮許りの間隔も無し」と表現していることから明らかである。

<sup>12</sup>「面門」は顔面をいう口語。『水滸全伝』第二三回に「武松は只の脚を把んで大虫の面門上の眼睛裏を望けて只顧ら乱踢る」、『蘇軾文集』卷二二「贊禪月所画十八大阿羅漢」第十一羅怛羅尊者賛に「面門は月のごとく満く、瞳子は電のごとく爛く」、北涼曇無讖訳『悲華経』卷一陀羅尼品に「広長舌を出して遍ねく面門を覆い、其の舌より六十億光明を放つ」（大正藏三・一七四上）。伝統的な佛教学では口を意味し、如来が口から五色の光を放つ（説法の喩え）というように用いられるが、義玄は面門から発するものを「六道の神光」（示衆の語）、すなわち六根のはたらきに置き換えている。それは『宗鏡録』卷九八、『景德伝灯録』卷二八がこのあとに続けて、「心法は形無くして十方に通貫す。眼に在りては見ると曰い、耳に在りては聞くと曰い、鼻に在りては香を嗅ぎ、口に在りては談論し、手に在りては執捉し、足に在りては運奔す。元

何なるか是れ無位の真人？<sup>14</sup>師禪牀を下り把住して云く、「道え！道え！」<sup>15</sup>僧擬議す、師拓開<sup>16</sup>して云く、「無位の真人は是れ什麼たる乾屎橛ぞ！」<sup>17</sup>便ち方丈に帰る<sup>18</sup>。

【日訳】師（臨濟義玄、？〜八六六）は上堂して言った、「諸君の裸一貫の身に位階なき真人がいる。それが顔から常に出入りしているぞ！まだ確認しておらぬ者は、今こそ見とどけよ！」すると僧が一步踏み出して問うた、「位階なき真人とは、何でありましょうか？」師はただちに禪牀を降りひつ捕まえて、「言え！言え！」僧が何かを言おうとするや、師は突き放して、「位階なき真人が何たる屎棒か！」言うなり、方丈へ帰ってしまった。

とは是れ一精明にして分れて六和合と為る」（四七）示衆一（4）の語と敷衍していることから明らかである。すなわち「無位の真人」とは超越的実体ではなく、心法（心なるもの）であり、それが感覺器官の活動として現れる、つまりは活動する生身の人間のことにはならない。

<sup>13</sup>「まだこれを認めていない者は、さあとくと見よ！」「証拠」は正しいと証明して認めること。

<sup>14</sup>そのとき僧が前に出て問うた、「無位の真人とは何のことを言っておられるのか？」

<sup>15</sup>師は禪牀を降り、僧をギョツとつかまえて、「言え！言え！」「無位の真人」とはそなたのことだ。問うのでなく、「無位の真人」たるところをはたらかせ、みづから言ってみよ。

<sup>16</sup>僧が何かを言おうとしたところを、すかさず。「擬」は「欲」（〜しようとする）の義の口語。下に「便」で承ける構文。

<sup>17</sup>「拓開」は突き放す。「拓」は手で物を推す動作、「開」は離れる意の補語。

<sup>18</sup>師は突き放し、「無位の真人がなんたるクソ棒か！」と言いのこして、方丈へ帰ってしまった。この「什麼」は「なん」という（すばらしい、くだらない）〜か！という感嘆詞。「乾屎橛」とはひからびて棒状になった人糞。大慧宗杲の語に「人の屎橛を咬るは是れ好き狗にあらず」（『大慧語録』卷一四「秦国太夫人請普説」大正蔵四七・八七二上）という。人糞を喰うのは上等の犬ではないとは、他人の言葉をありがたがるのを叱る譬喩（入矢義高「乾屎橛」増補 自己と超越）岩波現代文庫、二〇一二）で、「無位の真人」が僧自身に他ならぬことに、咄嗟に気づくべきところ、「それは何なのか」と、学んだ知識で議論しようとした僧をあざけるもの。しかしこの一段は、上堂が格調高く切り出されながら、結局失敗に終わったことを、「便ち方丈に帰る」と結んでいるのであつて、「無位の真人」の揚言を悔いつつ不機嫌に自室へ帰ったという話である。そして義玄は「無位の真人」の語を、以後二度と使わなかったようである。このような誤解を恐れたためである。